

やり直せる社会をつくるために

市立太田中学校

二年

安藤圭吾

先日、私は東野圭吾さん原作のドラマ『手紙』という作品を観ました。この物語は、弟の進学費用を作ろうとするあまり、思わぬことから強盗殺人の罪を犯してしまった兄と、その兄を持つ弟・直貴の姿を描いた作品です。直貴は、自分が犯罪を犯したわけではないにもかかわらず、「殺人犯の弟」という先入観を持った目でしか見られず、進学、就職、恋

愛、人生のあらゆる場面で激しい偏見や差別に苦しめられていきます。どれだけ真面目に生きようとしても、過去や家族の罪が知られた瞬間に、周囲の人々の目が一変し、温かかった場所から追い出されてしまうのです。

私はこのドラマを観て、強い衝撃を受けました。一度犯罪が起きてしまうと、罪を犯した本人だけでなく、その家族や周りの大切な人までもが社会から排除され、静かに孤立していつてしまうという現実を突きつけられた

からです。直貴がいくら努力しても打ち砕かれてしまう理不尽さに、観ている間ずっと悔しさと悲しさを抱かずにはいられませんでした。

それと同時に、もし自分の身の回りで同じようなことが起こったら、私は直貴のような立場の人や、過ちを犯してしまった人に対して、偏見を持たずに接することができるだろうか、と考えました。ですが、正直なところ、私には「絶対に偏見を持たない」と言い切る

自信がありませんでした。もし学校や部活動、地域のコミュニティの中でそうした噂が流れたとき、周囲の人たちが噂話をしたり、冷たい目を向けたり、あからさまに距離を置くような雰囲気があったら、私は「そんな差別はやめよう」と声を上げられるでしょうか。恐らく、自分まで仲間外れにされたり責められたりすることを恐れて、周囲の流れに流されてしまうのではないかと感じてしまいました。自分自身の中にも、無意識のうちに人を遠ざ

けてしまう冷たさや弱さが潜んでいるのではないかと気づき、異物や異質な存在を排除しようとする人間の本性の恐ろしさを感じました。

色々と考えを巡らせるうちに、私はもう一つの恐ろしさにも気づきました。もちろん、犯罪そのものは決して許されることではなく、被害を受けた方やその家族の無念さを思えば、犯罪者を責める気持ちが生まれるのは当然のことです。しかし、直接関係のない周囲の人

々や社会全体が、怒りや恐怖に乗じて、その人や無関係な家族までも一斉に排除し、社会から抹消するかのよう差別してしまうこと。それこそが、集団や人間の持つ恐ろしさだと気づきました。誰か一人をターゲットにして全員で遠ざける空気は、一度生まれると歯止めが効かなくなります。そして、そうした排除の空気の中にいるとき、私たち人間は、自分が「正しいことをしている」と思い込んでしまいがちです。でも、正義感の裏に隠れ

た差別心や冷たさが、実は誰かの人生を追いつめ、孤立させているのだとしたら、それは決して正しい姿とは言えないと思います。

私は、ただ悪い人を刑務所に入れたり、社会から追い出したりするだけでは、本当の意味での問題解決には至らないと思います。

「罪を憎んで人を憎まず」という言葉があるように、犯した罪や過ちそのものは決して許されるものではなく、罪に対する償いは当然行われるべきです。しかし、罪を憎むあまり、

心から反省してやり直そうとする人や、何の関係もないその家族の未来まで全て奪ってしまっっては、社会を明るくすることはできません。

どれだけ深く反省し、過去の過ちを悔い改めても、社会から完全に孤立させられ、生きる場所を奪われてしまえば、その人は二度とやり直すことができなくなってしまうのです。それどころか、居場所を失った人が再び追いつめられ、新たな過ちを犯してしまうという

悪循環を生んでしまう可能性だってあります。社会を明るくするために本当に必要なのは、犯罪を許さない厳しい目を持つ一方で、過ちを悔い、更生した人たちの「立ち直りを支える温かさ」や「居場所」を作ることだと思いました。

そしてそのためには、まず私達一人ひとりの意識を変えなければなりません。ニュースやインターネット、周囲の「冷たい空気」や根拠のない噂話に流されない強さを一人ひと

りが持つことが、今の時代に最も求められているのではないでしょうか。SNSなどでは、毎日のように誰かの失敗や過ちが叩かれ、その家族まで特定されて攻撃される光景を目にします。しかし、そうやって他人の失敗をうわさ話のネタにして距離を置いたり攻撃したりすることは、形を変えた排除であり、差別です。人は誰も、生きている中で小さな失敗や過ちを犯すこともあれば、自分ではどうしようもない困難に巻き込まれることもあり

ます。だからこそ、誰かが一度失敗したときや、困難な立場に立たされたときに、突き放すのではなく「どうすればやり直せるか」を一緒に考えられる社会でありたいと思います。誰もが孤立せず、安心してやり直せる温かい社会を築くために、まずは私自身が心の中にある偏見の目をなくしていききたいです。学校生活の中でも、誰かが周囲から浮いてしまっていたり、孤立しかけていたりするとき、空気に流されずにそっと声をかけられるような強さを持ちたいと思います。身近な人の小さな孤立に気づき、偏見を持たずに手を差し伸べられる人間になること。それが、『手紙』という作品を通して私が考えたことであり、「社会を明るくする」ために考えた事です。